

# 梵文法華經写本における文献学的実証研究の推進 —— 仏典の原典を解説する意義 ——

西 康 友

## 1. はじめに一梵文法華經写本研究の意義

初期大乘仏典を代表する法華經は、梵文法華經 (*Saddharmapuṇḍarīka*: SP) の漢訳とされる『妙法蓮華經』<sup>1</sup> (406年) の出現によって、東アジアの多くの地域に伝承し、多くの人々に受容された。6世紀頃の日本への仏教公伝以来、『妙法蓮華經』が多くの日本伝統仏教・新宗教教団の所依經典と定められたこともあり、現在までに膨大な法華研究が存在する<sup>2</sup>。だが、主なものとして次の研究課題が残されている。

- (1) 『ケルン・南條本』 (Kern-Nanjio: KN) 校訂上の問題
- (2) SP 写本の伝承過程
- (3) SP 写本の系統分類
- (4) SP と漢訳法華經の対照研究についての問題
- (5) SP の成立・編纂問題

これらの課題解決には、現存する SP 写本すべての実証的な言語学的研究が必要不可欠である。

本稿では、上記の研究課題の概要と解決に向けて推進してきた筆者の研究をレビューし、研究状況とその意義を提示する<sup>3</sup>。

## 2. 梵文法華經写本研究の現状

SP 研究には、ケルン (Johan Hendrik Caspar Kern, 1833-1917) と南條文雄 (1849-1927) による KN (1908-1912年) を用いるのが一般的である。KN は8種類の SP 写本を用いた校訂本であるが、編集方法などの点で問題が存在する (後述)。

多くの SP 研究では、この問題を議論せず、KN 発刊以降に発見された SP 写本をほぼ参照せずに、KN だけを出典としているのが現状である。

SP 写本研究はイギリスの外交官・ネパール駐在公使であったホジソン

(Brian Houghton Hodgson, 1800-1894) が1824年に駐在地で写本を発見したことはじまる<sup>4</sup>。その後、ビュルヌフ (Eugène Burnouf, 1801-1852) やケルン、南條らによって SP 写本が紹介された。このことをきっかけに多くの探検隊が組織され、SP 写本が大量に発見されることになる。仏典中最多で67種類の SP 写本が現存し、それらは48種類に整理されている。最古のものは5世紀半ば書写の旅順本 (Lü)、最新のものは19世紀書写のパリ・アジア協会所蔵本 (P3) と推定される。これらは中央アジア (Central Asia: CA) 伝本とギルギット-ネパール (Gilgit-Nepal: G-N) 伝本に大別されている (図1)。CA 伝本は G-N 伝本よりも古い書写年代のものが多く、その多くが断簡のためほとんどが解読不明である。また G-N 伝本は CA 伝本にはない完本が多く出土しているのが特徴的である<sup>5</sup>。

これらの SP 写本を用いた校訂本は、(i) 複数写本混合校訂本と (ii) ローマ字転写校訂本の2種に分類することができる。(i) 複数写本混合校訂本は、複数の写本を混合したもので、KN に代表される。KN には写本を混合する際の編集方法に問題があるため、これを是正すべく3つの KN 校訂本が刊行されたが、いずれも KN と同様の編集方法のため、KN の問題が抜本的に払拭されるまでには至っていない。この解決には写本の一つひとつの整理が必要であると考えられ、現在までにほぼすべての写本の影印版 (図2: 梵文法華經大英図書館所蔵本 B の一部) と (ii) ローマ字転写校訂本 (図3: 図2の写本のローマ字化) が刊行されたことで、SP 写本の整理が大いに進捗した。しかし、(ii) ローマ字転写校訂本は、写本に欠損や不明瞭な箇所がある場合、当該箇所に KN 本文の用語を借用して校

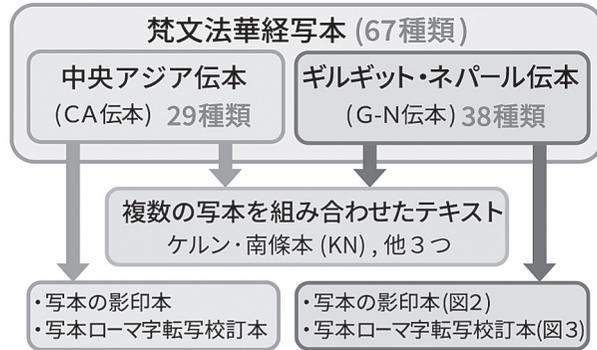


図1 現存する梵文法華經写本における系統分類の概要



図2 写本の写真版（影印本）の一例

oñ namaḥ sarvabuddhabodhisatvebhyā | namaḥ sarvatathāgatapratyekabuddhāya śrāvakebhyo 'tītānāgatapratyutpannebhyā ca bodhisatvebhyāḥ || evaṃ mayā śrutam ekasmi-  
n samaye bhagavān rājagṛhe viharatī sma || grdhakāṭṭe parvate mahatā bhikṣusamghena sārddham dvādaśabhir bhikṣusataiḥ sarvair arhadbhiḥ kṣīṇāsravair niḥkleśair vaśībhūtaiḥ  
suvimu(kta)cittaiḥ suvimuktaprajñair ājāneyair mahānāgaiḥ kṛtakṛtyaiḥ kṛtakaraṇīyair aparītabhāir anuprāptasvakārthaiḥ parikṣīṇabhasamyojanaiḥ samyagā-  
jñāsuviyuktacittaiḥ | sarvacetovasiparamaparamiprāptaiḥ | abhijñātā'bhijñāitair mahāśrāvakaiḥ || tad yathā āyuṣmatā c' āñātakaupḍinyena : | āyuṣmatā cāśva-  
jitena | āyuṣmatā ca bāṣpeṇa | āyuṣmatā ca mahānāmṇā | āyuṣmatā ca bhadrīkeṇa : | āyuṣmatā ca (mahā)kāśyapena | āyuṣmatā ca uruvilvākāśyapena | āyuṣmatā ca  
mahākāśyapena | āyuṣmatā ca gayākāśyapena | āyuṣmatā ca śāriputreṇa | āyuṣmatā ca mahā[saj]maudgalyāyana | āyuṣmatā ca (mahā)kātyāyana | āyuṣmatā ca 'ni-

図3 ローマ字転写校訂本（電子化テキスト）の一例

略号 頁・行	写本間で読みの異なる語（異読）の一例				
KN 1.6	dvādaśabhir	bhikṣuśataiḥ	sarvair	arhadbhiḥ	kṣīṇāsravair niḥkleśair vaśībhūtaiḥ
A 1b2	dvādaśabhir	bhikṣuśataiḥ	sarvvair	arhadbhiḥ	kṣīṇāsravair niḥkleśair vaśībhūtaiḥ
B 1b2	dvādaśabhir	bhikṣuśataiḥ	sarvair	arhadbhiḥ	kṣīṇāsravair niḥkleśair vaśībhūtaiḥ
Ca 1b1	dvādaśabhir	bhikṣusataiḥ	sarvair	a hadbhiḥ	kṣīṇā kl va bhūt ḥ
Cb	(欠損)				
K 10a2	dvādaśabhir	bhikṣusataiḥ	sarvair	arhadbhiḥ	kṣīṇāsravair niḥkleśair vaśībhūtaiḥ
P	(散逸して不明)				
W	(散逸して不明)				
O 6b6	dvādaśabhir	mahāśrāvakaśahasraiḥ	sarvair	arhadbhiḥ	kṣīṇāsravai niḥkleśair vaśībhūtaiḥ

\*KNは『ケルン・南條本』、A, B, Ca, Cb, K, P, W, OはKNが編集に用いた梵文法華經写本の略号

図4 従来の写本ローマ字集成テキストの一例

訂しているため、KNの編集方法と変わりがない。SP写本ローマ字転写校訂本によるG-N伝本の系統分類や複数のSP写本間で読みの異なる語（異読）を集約したローマ字集成テキスト（図4）<sup>6</sup>の作成なども試みられているが、研究途上である<sup>7</sup>。

### 3. 『ケルン・南條本』の問題点

KN（図5）は、ケルンと南條が1908-1912年の間に5分冊として出版したSP写本初の写本混合校訂本である。KNは8種類のSP写本（CA伝本カシュガル本Oと7種類のG-N伝本）を用いているが、以下の校訂上の問題（1）-（3）が指摘されている<sup>8</sup>。

- (1) 伝承・書写年代・出土地域を区別せずに複数の写本を混合して編纂している。
- (2) 校合する際に、どの写本からどのような理由でその語を採用したかの基準

が不明。

(3) 脚注に示された異読が不正確。

これらの問題解決を試みた3つのKN校訂本（『荻原・土田本』：WT 1934-1935年、『ダット本』1953年、『ヴァイドヤ本』1960年）が刊行されたが、KN本文を検討した後にさらに別の写本を混合させているため、KNの校訂方法と同様である。また近年に、植木2008がOやKNとWT、および『妙法蓮華経』を用いて、KNの主な日本語訳を対照した翻訳校訂本を出版して

いるが、現存する他のSP写本を参照せずにKNとWTを組み合わせただけで議論している<sup>9</sup>。このような事情により、いずれもKNを超える優れたSP校訂本とは言い難い。

#### 4. 文献学的実証研究のための言語解析プログラムツール開発

これまで述べてきたようなSP写本についての諸問題の解決策を段階的に導出するには、まず現存するSP写本の実証的な言語学的研究、すなわちSP写本の総合的な語彙・語彙・語形・語法・韻律・書写法等の分析研究が必要である。しかし、SPは全27章（KNでは全27章490ページ、約44万5千語）で構成され、KNが用いたSP写本すべての言語学的分析には膨大な作業が必要となる。そこで筆者は、これを効率よく分析する方法の一つとして、PCを駆使した言語解析が最適・有効であると考え、研究協力者（情報工学者）とともに言語解析プログラムツール（解析ツール）を開発・更新してきた。以下に、これまでの文献学的実証研究

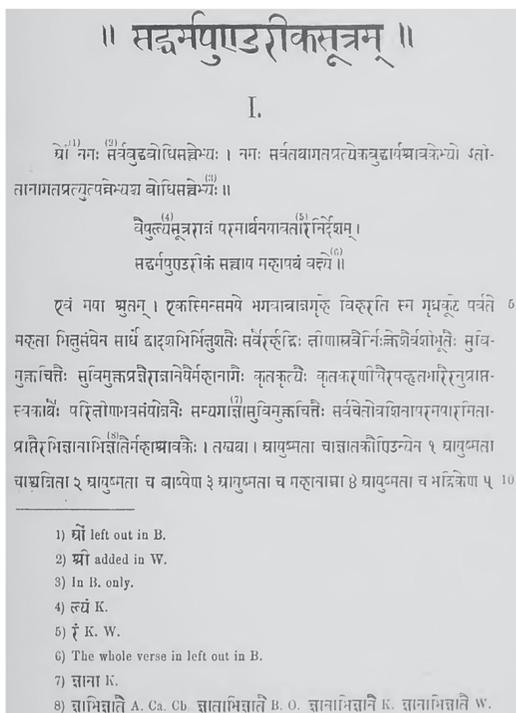


図5 『ケルン・南條本』本文と脚注（1頁目）

の環境整備を紹介する<sup>10</sup>：

① 特殊フォントの開発と更新

PC上でのローマ字表記の表示に必要な、SP写本の使用言語の特徴を反映させた特殊フォントを開発・更新してきている<sup>11</sup>。

② SP写本ローマ字本の電子化テキスト作成

解析ツールへ媒介させるための、SP写本をローマ字化した電子化テキストを作成した。

③ SP写本ローマ字本の語彙・偈文索引の生成と韻律解析

SP写本の語彙・語形には正順語彙索引<sup>12</sup>が、SP写本の文法には逆順語彙索引<sup>13</sup>が、他仏典などとの並行・類似偈文句検索や韻律には偈文索引<sup>14</sup>や韻律解析<sup>15</sup>が、それぞれの特徴分析に極めて有用なため、これを作成した。

④ SP写本ローマ字本集成の生成

①-③を応用し、解析ツールに②を媒介させ、SP写本間の並行・類似句をPC上で見つけ出す。すなわち、図4に示したようなSP写本をローマ字化した集成テキストを、解析ツールによってPC上に出力させる。これは、KNとKNが用いたSP写本の一覧であり、これによって煩雑であった多くのSP写本間の異読等を発見することが容易となる<sup>16</sup>。

以上の①-④は、従来から指摘されてきたKNの校訂上の問題解決の糸口につながり得る。この成果はSP写本研究において、学術的に信頼できる基盤テキスト構築に必要な基礎資料となることが期待できる<sup>17</sup>。

## 5. 梵文法華経における伝承過程解明の可能性

### 5.1. ケルンが提示した異読

筆者は、PC上での言語解析（前章の①-④）やSP写本における訳注研究を進めていくうちにSP写本に中期インド・アーリア語（Middle Indo-Aryan: MIA）的語形や、仏教混淆梵語（Buddhist Hybrid Sanskrit: BHS）、古典梵語（Classical Sanskrit: Skt.）等が混在していることに気づいた<sup>18</sup>。

すでにケルンやエジャートン（Franklin Edgerton, 1885-1963）がSP写本にお

ける複数言語の混在を指摘しており、このことから両氏は初期の SP がもともと MIA 的な言語状況下で編纂され、伝承する中で梵語化されたとする仮説を提唱している。<sup>19</sup>しかし、ブラフ (Brough 1954) など反論する研究者も多く、辻1970は SP 写本に存在する MIA 的語や BHS がより古い SP 写本の語形であるとみなす見解には注意が必要<sup>20</sup>であるとし、SP 写本の梵語化については未だ統一的な結論に至っていない。<sup>21</sup>

以上のことから、これまでに筆者は SP における梵語化仮説の可能性を見出そうとしてきた。ケルンが KN の Additional note に提示した91異読<sup>22</sup>について、筆者は古年代 (Lü)・中年代 (C5)・新年代 (R) の SP 写本を書写年代順に選択し、以下の検証結果を得た。

ケルンが提示した91異読は、次の4つにおおよそ分類することができる：

- I. 古典梵語に対する方言としての BHS、あるいは MIA による異読
- II. BHS / MIA / Skt. における名詞・形容詞の変化による異読
- III. 写本に特有な綴字・書写法等と考えられる異読
- IV. 動詞の時制・活用による異読

このうち、分類 I に該当する異読を検証したところ、SP 写本に出現数が少ない検証不能な異読を除いて、SP 写本間では書写年代順に MIA、あるいは BHS から Skt. に変遷しているという結果を得た。このことは、初期の SP が MIA 的言語状況下で編纂され伝承されていく中で梵語化されたとする、ケルンやエジャートンが提唱した仮説を支持する。すなわち、SP 写本における梵語化の可能性が極めて高いことを示している。<sup>23</sup>

一方、分類 II-IV の検証はこれから行う予定であり、今後のこれらの検証結果によって SP 写本の伝承過程を示唆する痕跡が見出されることが期待される。

## 5.2. 韻律に従わない梵文法華經偈文の存在

ケルンが提示した異読のほかに梵語化仮説を示唆するものには、韻律に従わない SP 偈文の存在が挙げられる。一般的に Skt. 接頭辞  $pr^{\circ}$ ,  $jñ^{\circ}$ ,  $st^{\circ}$  等の直前の短母音は長母音化するが、この長母音化によって韻律に従わなくなる偈文が散見される。このような偈文についてケルンは、当該箇所<sup>24</sup>の接頭辞  $pr^{\circ}$ ,  $jñ^{\circ}$ ,  $st^{\circ}$  等の最初

の二子音を一子音と見做せば韻律に従うと主張する<sup>24</sup>。荻原・土田はKN全偈文(1232偈)を検討し、このケルンの主張を支持している<sup>25</sup>。また、エジャートンは当該箇所が一子音として発音されていた可能性を示唆している<sup>26</sup>。このほか、辛嶋は荻原・土田とエジャートンが示唆している研究を深化させ、現存する主要なSP写本偈文の異読を検討している<sup>27</sup>。これらの研究者たちは、初期のSPがMIAから梵語化されたために、韻律に従わない偈文が存在すると主張する。しかし、SP偈文ではSkt.のままでも韻律に従うものも見られ、これらの主張には議論の余地がある。そこで筆者がKNの偈文句を調査したところ、短母音+接頭辞  $pr^\circ$  を含む偈文については401句が存在することがわかった。そして、次の①-⑥の結果を得た<sup>28</sup>。

- ① 現存するすべてのSP写本偈文(欠損や解説不能箇所、接頭辞  $p^\circ$  /  $pp^\circ$  /  $pr^\circ$  以外の異読を除く)にはMIA接頭辞  $p^\circ$  /  $pp^\circ$  が存在せず、すべてSkt.接頭辞  $pr^\circ$  である。
- ② KNにおける401偈文句では、(a) MIA接頭辞  $p^\circ$  とすることで韻律に従う215句; (b) Skt.接頭辞  $pr^\circ$  のままでも韻律に従う68句; (c) MIA接頭辞  $p^\circ$ 、Skt.接頭辞  $pr^\circ$  のどちらでも韻律に従う118句が出現する。
- ③ SP写本が伝承される中でMIAから梵語化されたと仮定すれば、単に(a)のようにSkt.接頭辞  $pr^\circ$  をMIA接頭辞  $p^\circ$  と置き換えればよいが、それによって韻律に従わなくなってしまう偈文句(b)が68句も存在する。
- ④ Skt.接頭辞  $pr^\circ$  をMIA接頭辞  $p^\circ$  と置き換えたときに韻律に従わないSP偈文句(b)については、菩薩の名前(例:*varaprabha*)を含む句やMIA接頭辞  $pp^\circ$  とすれば韻律に従う句、またMIA *bahūpakāra*-やSkt. *bahūprakāra*-を含む句であり、いずれにしても接頭辞の直前の母音が長音であるため、これらはMIAでもSkt.でも韻律に従う偈文句(c)に帰着する。
- ⑤ 主要な初期仏典(『スッタニパータ』、『ダンマパダ』、『テーラガーター』、『テーリーガーター』、『ジャータカ』)と『マハーヴァスツ』(Mv)、『ラリタヴィスタラ』(Lv)には多くの並行・類似偈文句が知られる<sup>29</sup>が、Mv偈文やLv偈文にはSP偈文と同様にSkt.接頭辞  $pr^\circ$  のみが見られ、MIA接頭辞  $p^\circ$  /  $pp^\circ$  が存在しない。

- ⑥ Mv・Lv・SPにおける並行・類似偈文句が多く存在することから、MvやLvの偈文句を参考にして、初期のSP偈文を編纂した可能性が高いことが期待される。

以上により、SPのSkt.接頭辞  $pr^\circ$  を含む偈文では、韻律に従わない箇所をSkt.接頭辞  $pr^\circ$  を一子音と見做す読み方・発音法とするのではなく、韻律に従う／従わないにかかわらず当該箇所をMIA接頭辞  $p^\circ$  /  $pp^\circ$  と置き換えていると解釈できる。このことは、初期のSPがMIAで編纂され、伝承される中で梵語化された可能性を示す一つである。

## 6. おわりに—今後の研究課題と展開

SP写本における諸課題を解決すべく、SP写本における文献学的実証研究の推進のために、PC上での言語解析プログラムツールを駆使したこれまでの筆者の研究進捗状況を述べてきた。紙面の関係で割愛した(3)SP写本の系統分類や(4)SP写本と漢訳法華經の対照研究などの議論は、別稿で論ずることとしたい。

これらの研究は、総じて(5)SPにおける成立・編纂問題を解決する糸口を見出すための成果の一つひとつであるといっても過言ではない。

このような積み重ねにより、今後、SPの成立・編纂が明らかとなり、文献学的・言語学的な確証を得た法華思想研究を推進できればと願っている。

### 【略号・出典・参考文献】

- [1] B: Or. 2204. The British Library. London.
- [2] C5: Add. 1684. Cambridge University Library. Cambridge.
- [3] P3: No. 2. Société Asiatique. Paris.
- [4] R: No. 6. Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland.
- [5] Brian Houghton Hodgson. 1881. Ed. William Wilson Hunter. *Catalogue of Sanskrit Manuscripts, Collected in Nepal, and Presented to Various Libraries and Learned Societies by Brian Houghton Hodgson*. Trübner & Co.: 3; repr. 2009. Kessinger Pub.
- [6] KN: ed. Hendrik Kern and Bunyiu Nanjio. 1908-1912. *Saddharmaṣaṣṭikā, Bibliotheca Buddhica X*. St. Pétersbourg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences.
- [7] WT: ed. Unrai Wogihara and Chikao Tsuchida. 1934-1935. *Saddharmaṣaṣṭikā-sūtram, Romanized and Revised Text of the Bibliotheca. Buddhica Publication by Consulting a*

- Sanskrit MS. and Tibetan and Chinese Translations*. Tokyo: Sankibo Book Store Ltd. (荻原雲来・土田勝弥『改訂梵文法華經』山喜房佛書林).
- [8] Franklin Edgerton. 1946. "Meter, Phonology, and Orthography in Buddhist Hybrid Sanskrit." *Journal of the American Oriental Society* 66: 197-206.
- [9] BHS: Franklin Edgerton. 1953. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- [10] Ed. Nalinaksha Dutt. 1953. *Saddharmaṇḍarīkasūtram, with N. D. Mironov's Readings from Central Asian MSS. Bibliotheca India. A Collection of Oriental Works, Work No. 276, Issue No. 1565*. Calcutta: The Asiatic Society; repr. 1986.
- [11] John Brough. 1954. "The Language of the Buddhist Sanskrit Texts." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 16.2: 351-375.
- [12] Ed. Paraśurāma Lakshmaṇa Vaidya. 1960. *Saddharmaṇḍarīkasūtram. Buddhist Sanskrit texts No.6*. Darbhanga.: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning (Buddhist Sanskrit Texts, no. 6).
- [13] 辻直四郎1970「法華經の言語」金倉圓照編『法華經の成立と展開』平楽寺書店：3-21。
- [14] 水野弘元1981「法句經対照表」『法句經の研究』春秋社：73-261；—— 1992「『スッタニパータ』の偈や經の対応表」『佛教研究』（国際佛教徒協会會）21：2-56。—— 1995「Udānavarga を柱とした諸法句經の偈の比較対照表」『佛教研究』24：5-76。
- [15] SMSR: Keisho Tsukamoto, Ryugen Taga, Ryojun Mitomo, Moriichi Yamazaki and Yoshiyuki Kawazoe. 1986-1988. *Sanskrit Manuscripts of Saddharmaṇḍarīka Collected from Nepal, Kashmir and Central Asia*. Vol. 1-2. The Society for the Study of *Saddharmaṇḍarīka* Manuscripts. Tokyo (塚本啓祥・田賀龍彦・三友量順・山崎守一・川添良善『梵文法華經写本集成ローマ字本・索引』第1-2巻、梵文法華經研究会刊)。
- [16] Seishi Karashima. 1992. *The Textual Study of the Chinese Versions of the Saddharmaṇḍarīkasūtra in the Light of the Sanskrit and Tibetan Versions. Bibliotheca Indologica et Buddhologica* 3. Tokyo: The Sankibo Press; —— . 1997. "Some New Viewpoints on Philological Studies of Early Mahāyāna Texts." In *Buddhist Studies* (Bukkyō Kenkyū) 26: 157-176; —— . 1998. *A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra. Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica* 1. Tokyo: International Research Institute for Advanced Buddhology. Soka University; —— . 2001. "Some Features of the Language of the Saddharmaṇḍarīkasūtra." In *Indo-Iranian Journal* 44.3: 207-230; —— . 2006. "Underlying Languages of Early Chinese Translations of Buddhist Scriptures." In eds. Christoph Anderl and Halvor Eifring. *Studies in Chinese Language and Culture: Festschrift in Honour of Christoph Harbsmeier on the Occasion of his 60th Birthday*. Oslo. Hermes Academic Publishing: 355-366.
- [17] Lü: ed. Jiang Zhongxin. 1997. *Sanskrit Lotus Sutra Fragments from the Lüshun Museum Collection Facsimile Edition and Romanized Text*. Lüshun Museum and Soka Gakkai.
- [18] 小槻晴明2005「『ケルン・南條本』再考」『東洋哲学研究所紀要』21：204(57)-194(67)。
- [19] 石田智宏2006「法華經の梵語写本 発見・研究史概観」『東洋文化研究所所報』10：1-28。
- [20] 植木雅俊2008『法華經－梵漢和対照・現代語訳』上・下、岩波書店。
- [21] Yumi Ousaka. 2014. "Neural Network Analysis of the Metre in the Saddharmaṇḍarīka-

- arika, based on the text by H. Kern and B. Nanjio.” In Study of Canons in Middle Indo-Aryan and Canons in Buddhism of Chuo Academic Research Institute’s Homepage: <http://www.cari.ne.jp/MyanmarPJ/EngH.html>.
- [22] 西康友2015「中央アジア系写本の梵文「法華經」における *kṛīḍāpanaka*-について」『東洋文化研究所所報』19: 1-18。
- [23] Seishi Karashima. 2016. “The Triṣṭubh-Jagatī Verses in the *Saddharmaṣuṅḍarika*.” *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* 19: 193-210.
- [24] Chiko Ishida. 2016. “A Historical Overview of the Discovery and Study *Saddharmaṣuṅḍarika* Manuscripts.” In Kenyo. Mitomo. 2016. ‘*Guiding Lights*’ for the ‘*Perfect Nature*’: *Studies on the Nature and the ‘Development of Abhidharma Buddhism A Commemorative Volume in Honor of Prof. Dr. Kenyo Mitomo for his 70<sup>th</sup> Birthday*. Tokyo: (471)492-(507)456.
- [25] 西康友2017「梵文「法華經」における *sāntika*- / *santika*- / *antika*- の用例」『印度學仏教學研究』66.1: 386-390.
- [26] Yumi Ousaka and Yasutomo Nishi. 2017. “Automatic Analysis of the Canon in Middle Indo-Aryan by Personal Computer IV.” *Bulletin of Chuo Academic Research Institute* (Chuo Gakujutsu Kenkyūjo Kiyō) 46: 97-105.
- [27] 辛嶋静志2019「『法華經』写本研究の重要性」『東洋学術研究』58.1: 339(2)-323(18)。
- [28] Yasutomo Nishi. 2019. “Examining the Sanskritization of the *Saddharmaṣuṅḍarika*: A Study of Synonyms in the Text.” *Journal of Indian and Buddhist Studies* (Indogaku Bukkyogaku Kenkyu) 67.3 : 1106-1111.
- [29] Yasutomo Nishi. 2019a. *Saddharmaṣuṅḍarika, Central Asian (Kashgar Manuscript) and Gilgit-Nepalese (Kern-Nanjio’s Edition) Recensions of Transcription in Roman Script, Word Index, Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series 1*: Chuo Academic Research Institute.
- [30] Yasutomo Nishi. 2019b. *Saddharmaṣuṅḍarika, Central Asian (Kashgar Manuscript) and Gilgit-Nepalese (Kern-Nanjio’s Edition) Recensions of Transcription in Roman Script, Reverse Word Index, Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series 2*: Chuo Academic Research Institute.
- [31] Yasutomo Nishi. 2019-2022. A Study of the Sanskrit and Chinese Lotus Sutra. In Chuo Academic Research Institute’s Homepage: <https://www.cari-saddharmapundarika.com/>.
- [32] 西康友2020「IT 言語解析による梵文法華經写本と漢訳法華經の対照研究」『中央学術研究所紀要』49: 257-273。
- [33] Kaie Mochizuki and Byungkon Kim. 2020. *Bibliography of the Studies on the Saddharmaṣuṅḍarikaśūtra (1844-2020). Lotus Sutra Studies I*: The International Institute for Nichiren Buddhism of Minobusan University.
- [34] Yasutomo Nishi. 2020. *Saddharmaṣuṅḍarika, Central Asian (Kashgar Manuscript) and Gilgit-Nepalese (Kern-Nanjio’s Edition) Recensions of Transcription in Roman Script, Pāda Index and Reverse Pāda Index, Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph*

Series 3: Chuo Academic Research Institute.

- [35] Yasutomo Nishi. 2021. "The Possibility of Verifying Sanskritization in the Saddharmapundarika: A Study of Kern's Variant Readings." *Journal of Indian and Buddhist Studies* (Indogaku Bukkyogaku Kenkyu) 69.3: 1045-1053.
- [36] 西康友2021a 「『ケルン・南條本』に示された異読の検証－梵文法華經写本における梵語化検証の可能性－」『中央学術研究所紀要』50: 129-152。
- [37] 西康友2021b 「梵文法華經の偈文における韻律の特徴－初期仏典等との類似偈文句の対照を通じて－」『印度學仏教學研究』70.1: (93)430-(98)425.
- [38] Yasutomo Nishi. 2022. *Saddharmapundarika, Kern-Nanjio's Edition in Roman Script with Complementary Footnotes, Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series 6, Kern-Nanjio's Edition Romanized Text I*: Chuo Academic Research Institute.
- [39] 西康友2022 「梵文法華經諸問題解明のための基盤テキスト構築－『ケルン・南條本』校訂における研究課題－」『中央学術研究所紀要』51 (印刷中)。

※ 本稿は JSPS 科学研究費補助金 (科研費) JP21K00058 の成果の一部である。

- 1 鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』『大正新脩大藏經』9: 1-62。
- 2 法華研究を網羅した文献目録に Mochizuki and Kim 2020がある。
- 3 本稿は、令和3年度第一回身延山大学国際日蓮学研究所例会での「梵文法華經における文献学的実証研究－仏典の原典を解読する意義－」と題する口頭発表を加筆・修正した論文である。
- 4 Hodgson 1881.
- 5 SP 写本研究概観については Ishida 2016を、現存する SP 写本とそのローマ字転写校訂本の総覧については Nishi 2019-2022. A Study of the Sanskrit and Chinese Lotus Sutra: <https://www.cari-saddharmapundarika.com/sp-1>を参照されたい。SP 写本、およびローマ字転写校訂本の SP 写本略号は SMSR に準じている。
- 6 SMSR があるが、SP 第2章までで未完である。
- 7 辻1970や辛嶋2019のほか、多くの研究者が SP 研究の必要性和重要性を議論している。
- 8 『ケルン・南條本』については多くの論考があるが、主なものとして小槻2005や石田2006がある。
- 9 辛嶋2019: (11)330に同様な見解がある。
- 10 詳細な議論については、西2020、および西2022を参照。
- 11 Ousaka and Nishi 2017.
- 12 Nishi 2019a.
- 13 Nishi 2019b.
- 14 Nishi 2020.
- 15 Ousaka 2014.
- 16 今後、Nishi 2022の刊行準備に作成した KN、および KN が用いた SP 写本ローマ字化集成テキストを、*Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series* にて刊行を予定している。
- 17 筆者は KN の校訂上の問題を解決すべく、KN 本文テキストの校訂に向けた KN の脚注補完に着手している。JSPS 科学研究費補助金 (科研費) JP21K00058 (「梵文法華經諸問題解明

のための基盤テキスト構築－『ケルン南條本』校訂へ向けて』: <https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-21K00058/> の助成を受け、この成果の一部を *Saddharmapuṇḍarika Kern-Nanjio's Edition in Roman Script with Complementary Footnotes* として刊行した (KN 第1-3章部分) : Nishi2022。

- 18 西2015。
- 19 H. Kern. "Preface." In KN: I-XII; F. Edgerton. "Buddhist Hybrid Sanskrit." In BHSG: §1.33ff.
- 20 ケルンやエジャートンによる提唱についての議論は辻1970: 注5に詳しい。
- 21 Karashima 1992-2006がケルン・エジャートンの提唱を部分的に支持している。
- 22 H. Kern. "Preface." In KN: VIff.
- 23 管見では、分類Iに該当する22異読を検証している。またケルンが提示した異読以外にも分類Iと同様な異読を見出し検証している : 西2015; 西2017; Nishi2019; Nishi2021; 西2021a。
- 24 Kern 1912. "Additional note." In KN: XI.
- 25 WT: 1-36.
- 26 Edgerton 1946: §§45-47.
- 27 Karashima 2016.
- 28 西2021b.
- 29 水野1981-1995など。